代表作時代小説

日本文藝家協会編

昭和五十一年度

東京文藝社

昭和五十一年度
代表作時代小説　一八〇〇円
昭和五十一年五月三十日　発行

編纂者　日本文藝家協会
発行者　角谷奈良雄

発行所　株式会社東京文藝社
本　社　東京都新宿区西大久保三―二六
出張所　東京都新宿区払方町一番地
振替・東京六―二一七五七
電話・(二六〇)二五五〇

0293―769907―5170
無検印承認

まえがき

伊藤桂一

この「代表作時代小説」も、巻を逐うて、発行部数が伸びている。世間の景気にはかかわりなく、部数が着実に伸びているということは、固定読者が離れず、さらに、新しい固定読者がふえている、ということだろう。きびしい世の中を生きている人人が、いささかの刻を盗んで、疲れた頭を休めようとするとき、時代小説は、いちばん副作用のない妙薬ということになるだろう。読者の多い理由はたぶんそこにある。

私は、時代小説は、書き手がふえればふえるほど、読者もまた、新しくふえてゆくと思う。そういう性質の文学である。ただ、書く側に立つと、技術的になにかとむつかしいところもあって、他の小説の分野のようには、新人作家の出にくいことも事実である。しかし、時代小説には、こう書かねばならぬ、という方式があるわけではなく、むしろ、濶達に想像力を伸ばすには、もっとも便宜なジャンルの小説であるような気がする。

私は、今から二十数年前、編集者にすすめられて、はじめて時代小説を書き、それを雑誌に載せてもらった時、なんともいえぬ、いい気分になったことを覚えている。それは、ほかの種類の作品を採用してもらった時とは、かなりニュアンスの違う、たのしさ——だ

ったのである。いってみれば、自分の密室で発案し、それをたんねんに工夫してつくり上げた夢――を、いま、だれかにわけてあげられる、といった気分でのたのしさであり、嬉しさだったのである。実作者としての私の立場を正直にいえば、今も、その気分はかわらない。ただ、昔も今も、ひとつずつ作ってゆく、時代小説づくりのむつかしさはかわらない。職人が、水晶細工をするような、こまかい配慮で、私は作品をまとめてゆく。

この一巻にあつめられた諸家の作品も、それぞれの情熱や技術をそそぎ込んで、最高度につくられた作品ばかりである。作品水準もだが、同時に、つとめてヴァラエティに富んだ内容構成をもしたいところに、編纂上の苦労がある。これからも、読者諸賢に喜んでいただける、すばらしい時代小説の世界を、一巻ずつ、ひらいてゆきたいものである。とにかく、時代小説のもつ、ゆたかな可能性を、思いみることは実にたのしい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目

次

不忍池暮色　池波正太郎　七
女形と胡弓　戸板康二　三
葉桜の蔭に　南條範夫　四
消えた流人　村上元三　六
自転車お玉　井上ひさし　八
海から来た側女　永井路子　二
螢の骸　岩井護　一三
旅人西行　今東光　一五
忠治はぐれ旅　長部日出雄　一七
憤　綱淵謙錠　一九
祇園ぎつね　杉本苑子　二三

嘲斎坊とは誰ぞ　小田武雄　二三
上意討ち　五味康祐　二五七
鱗雲　藤沢周平　二七一
江戸の娘　平岩弓枝　二八九
幻島記　白石一郎　三〇九
二人の卜伝　志野亮一郎　三二一
剣鬼走る　早乙女貢　三六九
石松の故郷　伊藤桂一　三八三
役たたず　半村良　四〇五
項の貌　渡辺淳一　四一九
まえがき　伊藤桂一
あとがき　武蔵野次郎

装幀　太賀　正

作者のことば

この小説は一年ほど前に書いたもので、そのときの余話とか、おもい出を書けといわれても、忘れてしまっているし、むりなはなしだ。

いつものように、登場人物のうごくにまかせて、この短篇を書き終えた。

大正十二年一月二十五日東京生

「錯乱」にて第四十三回直木賞受賞

主著―「鬼平犯科帳」

不忍池暮色

池波正太郎

一

「相手が女だからといって、気をゆるしてはいけねえ。相手が相手だけに、充分に気をつけて、この殺しを他人に見せてはならねえ。そこのところは弥吉、お前がする殺しだけにぬかりはあるめえが……」

と、羽沢の嘉兵衛が小判二十両を弥吉の前へ置いた。

殺しの報酬の半金である。

とすれば、

（合せて四十両か……女ひとりの殺しにしては、大きい金だ）

嘉兵衛の前へ、きちんと膝をそろえている目吹の弥吉は、胸の内で北叟笑んだ。

羽沢の嘉兵衛は、もう六十をこえているが、本所・両国一帯の盛り場を縄張りにしている香具師の元締である。妾のおかねに、本所の回向院近くで〔河半〕という料理茶屋を経営させてい、女房が死んでからの嘉兵衛は、ほとんど〔河半〕に住み暮していた。

千に近い香具師たちを束ねて、縄張り内の物売りから見世物の興行にいたるまで、いっさいの権利をつかんでいる嘉兵衛の、羽ぶりは大きい。

それだけに裏へまわると、江戸の暗黒街と、

「切っても切れぬ……」

羽沢の嘉兵衛なのである。

欲得ばかりではなく、下総の漁師の子に生まれ、江戸へ出て来て、これだけにのし上るまでには、いうにいえない過去があるし、退き引きならぬ義理が絡み、金ずくで、ひそかに人を殺めることも仕てのけねばならない。

むろん、自分の手は血で汚さぬ請負った金の半分をわたし、他人に仕掛けさせるのである。

こうしたとき、目吹の弥吉は、嘉兵衛にとって、

「なくてはならねえ男……」

であった。

常陸も下総に近い、利根川辺りの村に生まれたということだが、目吹の弥吉の過去を、羽沢の嘉兵衛もよくは知らない。

見たところ細っそりとした躰つきの、年齢は三十だというが五つ六つは老けて見える弥吉は、口のききようもおとなしく、いつも火鉢の灰のような冴えない顔色をしている。

だが、殺しの巧妙さと、的を外さぬことにおいては、折紙つきの男であった。

「それで元締。殺める女は、どこの……？」

「浅草茅町の小間物問屋・伏見屋の内儀だよ」

「伏見屋の……」

茅町の伏見屋といえば、目吹の弥吉の耳へもきこえて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

いるほどの大きな商家だ。
その伏見屋の主人・長次郎の妻お孝を、だれかが暗殺しようとしているのであった。
「だから、ぬかりのねえようにと、念を入れたのだ」
「わかりました。元締」
「たのむぜ」
うなずいた弥吉は、すぐに立ちあがり、河半の奥の一間から出て行った。
だれが、どんな事情でお孝を殺そうとしているのか……それは弥吉に関わり合いのないことだ。大金の報酬をうけ、たのまれた相手を人知れず殺してしまうことだけが、彼の仕事なのである。
河半を出た弥吉は、両国橋を西へわたった。
先ず、手はじめに浅草へ出て、伏見屋の店構えを、あらためて見ておこうとおもったのだ。
羽沢の嘉兵衛は「殺せ」といっただけで、その手段までは示唆してくれぬ。
手段は、弥吉が見出さなくてはならぬ。
大川（隅田川）の水は黒みを増し、川面を行き交う大小の舟足までが重く見えた。
秋も暮れようとする或日の昼前のことで、空は厚い雲におおわれ、風は絶えていたが、まるで冬のように底冷えが強かった。
茅町の伏見屋の前へあらわれた目吹の弥吉は、伏見屋の真向いにある〔小玉庵〕という蕎麦屋へ入って行った。
きっちりと帯をしめ、羽織も着ている目吹の弥吉は、どこぞの小さな店の主人のようにも見える。
茅町は、浅草御門外の蔵前通りをはさむ両側に、わかれている。
伏見屋は西側の一丁目にあり、目吹の弥吉が二階の小座敷へあがった小玉庵は、東側の一丁目にあった。
弥吉は、二本の酒をのみながら、窓を細目に開け、伏見屋の店先をながめている。
江戸中にのみならず、駿府（静岡市）や甲府などの小間物屋からも仕入れに来るというだけあって、間口五間の店先の、人の出入りがはげしい。
酒のあとの蕎麦を口に入れかけて、弥吉は、
（おや……？）
店の横手に見える塀の潜門から、中年の女中をうしろに、通りへ出て来た女を見て、
「もし、ちょいと……」
蕎麦を運んで来た小女が、出て行きかけるのを呼びとめ、
「ほれ、あの、いま、あそこへ行く二人づれの女の、こっちのほうは、たしか伏見屋さんのお内儀だったね？」
「ええ、そうでございますよ」

気にもとめず、小女は、そうこたえた。
「どうもね、酒をのんだものだから、蕎麦へ口がまわらなくなってしまった……」
すばやく、勘定をすまし、弥吉は小玉庵を飛び出した。
伏見屋の内儀・お孝は、女中をつれ、神田川に沿った道を左衛門河岸へ出た。
弥吉は、すぐに追いついた。
お孝は二十七歳。夫・長次郎との間に二人の女の子をもうけている。
嬌やかな、女にしては背丈の高い躰つきなのだが、腰のあたりの肉置きに、女のさかりがみなぎっていた。

そのころ、伏見屋の奥座敷では……。
主人の長次郎が黙念と茶をのんでいる。
長次郎は三十五歳。
この年齢にしては、ひどく肥っていい、顔も躰も肌が白く、冬の最中でも鼻の頭へうす汗をにじませている長次郎であった。
童顔の、長次郎の小さな眼が妖しく光っている。
このところ、妻のお孝は十日に一度ほど、諸方の神社へ参詣に出かける。
五つになる次女のおきみの躰が、一年ほど前からあまりおもわしくなく、病床につくことが多い。

「おきみの躰を、なんとか丈夫にとおもいまして……」
お孝は、信心の理由を、長次郎にそういった。
だが実は、神仏への信心、参詣に事よせて、お孝は或る男と或る場所で、
「忍び逢っている……」
ことを、長次郎は知っているのだ。
或る場所とは、上野の、池ノ端仲町にある〔よし本〕という小さな水茶屋の二階座敷だそうな。
或る男とは……むかしから伏見屋へ出入りをしている大工の棟梁・芳五郎の下ではたらいている伊太郎であった。
このことを知ったとき、愕然となって、しばらくは口もきけなかった伏見屋長次郎であったが、しばらくすると、真底からの怒りが胸にこみあげてきた。
(畜生……よくも……)
と、その怒りは、妻の間男である大工・伊太郎へ向けられたというよりも、お孝が憎くて憎くてたまらないのである。
お孝は、神田・相生町の小間物屋・吉野屋清蔵のむすめで、吉野屋が伏見屋から商品の仕入れをすることもあって、
「どうしても、吉野屋のむすめと夫婦になりたい」
と、いい出してきかなかった長次郎に、父も母も根負

けがしてしまい、
「どうもうちにはつり合わない縁談だけれども、そこまでいうのなら仕方がない」
父母は、一人息子のねがいをゆるしてくれた。
吉野屋にとっては、それこそ、
「ねがってもない……」
玉の輿だったといえよう。
たちまちに縁談がととのい、お孝は長次郎の妻となり、それから四年の間に、伏見屋の父と母が亡くなってしまったのだから、当時の商家の妻としては、めぐまれすぎていた。
「同じ女に生まれるのなら、吉野屋のむすめのような、よい器量の女に生まれてくるものだ」
と、当時は外神田界隈で、人びとがそういい合ったそうな。
お孝の実家の吉野屋は、いま、伏見屋の〔支店〕のようなかたちとなり、商売も繁昌するし、店舗もひろげている。
（畜生。お孝は何ということをしてくれたのだ。私が実家にまで目をかけてやっている恩を忘れて、よくも……よくも、私を踏みつけにしたものだ）
このことであった。
絶対に、自分を裏切ることはない貞淑な妻だと信じきっていただけに、長次郎の憎悪は、大工・伊太郎から逸れ、ひたと妻へ射つけられている。
（生かしてはおけない……）
ついに、長次郎は決意をした。
決意したからには、これを、おもてに出してはならぬ。店の奉公人にも知られてはならぬ。見て見ぬふりをよそおっている長次郎の胸の底には、陰惨な憎悪が烈しく昂まっているのだ。
夫が、わざと騙されているのも知らぬ妻は、依然、伊太郎との逢いびきを熄めようとはせぬ。
それはさておき、伏見屋長次郎は、以前から妻に隠れての女遊びは相当なものなのだ。
現に、それと知らずにお孝と伊太郎が逢引きをしている出合茶屋〔よし本〕へも、長次郎は女と逢うために、何度も通っていたことがある。
お孝の逢びきを長次郎へ密告したのは〔よし本〕の女あるじ・お吉であった。
それとわからぬように、羽沢の嘉兵衛へ、お孝暗殺の手引きをしてくれたのも、お吉だ。
四十をこえてから、水茶屋のあるじにおさまったというお吉は、以前、谷中・茶屋町の岡場所で何年も客をとっていたことがあるというわさを、長次郎も耳へはさんだことがある。

（いまに……見ているがいい）

茶をのみ終えた長次郎は、ゆっくりと店の帳場へ出て行った。

二

この夏から秋にかけて、

（もし……もし、だれにもわからないように、あの女を、この世から消してしまったら……そうしたら、うちの人は、きっと私のところへ、もどって来るにちがいない……）

ふと、おもいついたそのことが、日毎に、お清の胸の内でちからを加え、

（そうだ。それよりほかに、道はないのだもの）

殺意が、ぬきさしならぬものとなってきている。

お清は、大工・伊太郎の女房であった。

伊太郎との間に、お茂といって、四つになる女の子があった。

この夏までは、お清にとり、何ひとつ不足のない月日が、たしかな重味となって感じられていたのである。

伊太郎は、外神田の〔大芳〕とよばれる大工の棟梁・芳五郎の下で、はたらいている。

年齢は二十八で、子供のころから大芳で叩きあげただけに、親方の信頼も厚かった。

伊太郎の父親も、先代の大芳の下ではたらいていた大工だったが、

「おれが十のときに、足の小さな怪我がもとで、あっけなく死んじまった……」

と、伊太郎はいった。

その傷から黴菌が入り、破傷風を起したらしい。しかも、その前の年に、母親が病歿している。

そこで、孤児となった伊太郎を、大芳の親方が引き取り、一人前の大工にしてくれたのであった。

さて……、

大芳は、諸方の商家へ出入りをしているが、浅草茅町の小間物問屋・伏見屋も、先代からの出入り先で、この春から夏にかけて、伏見屋が店舗の一部と、奥の家族の居住部分を、

「建て直したい」

ということになり、大芳は、すぐさま、仕事にかかった。

伊太郎も、毎朝、元鳥越の住居から、茅町の伏見屋へ通うことになったわけだが……。

その改築工事の折に、伏見屋の内儀・お孝と通じ合い、普請が終ったあとも、いまだに密会をつづけているらしい。

このことを、ひそかに、お清の耳へ入れたのは、伊太

郎と同じ〔大芳〕ではたらいている岩五郎であった。
岩五郎は四十に近い年齢だし、四人の子持ちだけに、分別もあり、お清は伊太郎と世帯をもったときも、いろいろ世話になっている。
「このことに気づいているのは、いまのところ、おれだけだ」
と、岩五郎は、お清にいった。
「おれも、ずいぶん、伊太郎にいってやったが、聞き入れてはくれねえのだ。なに、こんなことを女房のお前の耳へ入れるなんてことは、まったく、ばかげている。何も知らねえお前に、だ。だがなあ、お清さん。こうなったら、もう、早いうちに、お前から伊太郎へいってもらい、けむりが立たねえうちに、火を消してしまわなくてはいけねえ。出入り先の大店のおかみさんと伊太郎が、人目を忍ぶ深い仲になっているなぞということが、大芳の親方に知れたら、こいつ、とんでもねえことになってしまうぜ。親方が伏見屋への出入りをさし止められることはもちろん、たとえ伏見屋で、事を内密にしてくれても、伊太郎は、もう江戸の大工としてやっていけねえ」
おもいあぐね、おもいきって、岩五郎はお清に打ちあけたのだ。
岩五郎がいうには、
「二人は、子供のころから知り合っていたらしい。というのは、それ、大芳の親方の住居が外神田の松永町で、伏見屋のおかみさんの実家とは目と鼻の先だ。だから、親方のところへ引き取られていた伊太郎は、おかみさんが子供のころから見知っていたらしいのだ」
その二人が、十年ぶりで再会し、家も、妻も夫も忘れて情炎に狂いはじめた。
そういわれてみると、お清にも、いちいち、うなずけることがあった。
そこは夫婦の間のことで、これまでの生活が微妙に変りつつあることを、お清は感じとっていたのである。しかし、それが何か、よくわからなかった。まじめに、はたらきつづけてきた夫の伊太郎が何かの拍子に……たとえば、夕餉の膳に向っていて、ふと、箸を持つ手をとめ、ぼんやりとあらぬ方を見つめているときがあった。そんな様子を、かつて、お清に見せたことのない伊太郎である。うつろな眼の色でありながら、何か、妙に気味のわるい光りが凝っていたのを、お清はおぼえている。
たまりかねて、
「お前さん。どうしたの？」
尋くと、伊太郎は、
「いや、別に……何でもねえ。ちょいと考え事をしていたものだから……」
と、こたえた。これが、一度や二度ではなかった。

伊太郎の腕に抱かれているときも、お清は、これまでにはなかった何かを、肌で感じとっていた。

（そうだったのか……）

おどろきもし、哀しみもしたが、そのときのお清は、伊太郎を説き伏せる自信があったといえよう。

或夜、お茂を寝かしつけてから、お清はいきなり、伊太郎にいった。

「お前さん。此間ね、お前さんが伏見屋のおかみさんと歩いているところを見ましたよ」

伊太郎は青くなった。

顔を伏せたまま、沈黙した。

みごとに、お清のかけた幼稚な罠にかかって、いいわけもできぬ。伊太郎とは、そうした男なのだ。

「何をいっていやがる」

と、笑いに誤魔化すことも、

「どこで見たというのだ？　嘘もやすみやすみいえ」

と、反撃する術も持たない。

このとき、お清は、

（こんな正直な、うちの人に手を出したのは、きっと、伏見屋のおかみさんのほうからだ）

と、おもった。

お清は、岩五郎からいわれたように、伊太郎を説き伏せた。伊太郎は泪を浮かべて、

「もう、二度と、会わねえよ」

誓ってくれた。

だが、このごろ、伊太郎は、また、伏見屋のお孝と密会しはじめたらしい。

お清も、こうなると、前のときのように、おだやかな口をきいてはいられなくなり、伊太郎も血相を変えて、たがいにののしり合った。

いまの伊太郎は、三日に一度ほどしか、家へ帰って来ない。

岩五郎の家へ泊っているのでもなかった。

「どうも困った。伊太郎が仕事を怠けるので、親方も気にしていなさる。おれも、ずいぶんいってやったが、聞き入れてくれねえのだ」

岩五郎も、あぐねきっている。

お清は、すでに、二人の密会する場所をつきとめていた。

三

「もう、冬だねえ……」

細身だが、筋肉の引きしまった大工・伊太郎を、伏見屋のお孝は、ふとやかな双腕に抱きしめ、ためいきのようにつぶやいた。

「師走（十二月）に入ったら、私の身も自由にはならな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.